〔史料紹介〕

渡部平太夫・渡部勝之助

『桑名日記・柏崎日記』（その一）

松川由紀子

これは、昨年の四月号に掲載された拙稿「桑名日記・柏崎日記にみられる近世庶民の家庭教育について」の史料篇である。

桑名日記より

一八三九年六月十日（鐐之助三歳）

鐐むくりと起ると、金毘羅様へ太こ叩きにゆこふ、お爺さとゆこふ、ちやらちやらはいて行ふといふ故、裏口より連れて行。お婆と行つたり、おみちさと行つたり余念なく遊ぶ。

同年六月十七日

御婆と鐐こおよし、お隣のおこうさ鳥居の祭にゆき、四ツ過かへる。鐐こ太鼓のばちを持て行かねばならぬといふ。いろ〳〵だましてもきかず、よぎなく持せてゆきしに、川口鳥居に太こしばりつけてありしを、少したゝきたんのういたし候よし。もどりにねむりてかへる。

同年六月二十日

鐐児とかく御ぜんを食べず、らくがん度々ねだり、五十文のらくがん今日食べる。御蔵よりかへりがけに、京町かみくずやの本救命丸をとゝのへ飲せる。

同年六月二十一日

鐐こ朝も昼も御ぜんよくたべる。しかし次第にわんぱくになり、お婆の乳をしつこく吸ふには困る。大分足もたつしやになり、雪駄も下駄もひとりではいて歩く。

同年七月一日

鐐こひる寝ながら宵の内大分起ている。今夜は留五郎、重次郎、三こ三人が鐐児をつれて、町屋川へ涼みにゆき、今村はとあみを持てゆき、あゆ取て見せたり何かする内、つい眠りしゆへ、三こふところへ入れ、五ツ時分つれて帰る。

同年七月十五日

鐐こ西瓜をすきになり、朝めがさめると、寝どこですいくわくんなへ、すいくわくんなへとねだり、あまりたべさせては、もしどくになるまへかと、さいわい今夜医者がきたゆへ聞きたれば、水ものにてどくにはならずといふゆへ安堵、まくわうりはよろしからずといふ。

同年七月十七日

鐐こはちとねつがありしを、あせものせいじやと思ひ、まへばん湯へいれしに、からだへも四つ五つ真赤なものができ、これはすいとうじやそふじやと湯へも入らず、救命丸をのませたり、一角丸をのませたゆへ、元気はよけれど腹やせなかへできているゆへ、かげんしらぬものはだかれず、留五郎と三こがつれてゆこふといへども、ことわりてやらず、夕かた矢田町へねりこがすこしきたのを、おせんがゆき見せる。

同年七月二十七日

今日は庚申ゆへ、豆いりをして鐐こをかわいがつてくださる若衆へ、お茶をあげる。

同年八月四日

鐐こ日にまし足はたつしやになり、大口はきく。おせんのところ毎日たび〳〵ゆき、夕方洗湯がへりに佐藤へゆき、若衆がきていると、じきに相撲をとる。ひるももう内へゆこふと云て、門のそとへ出たじぶん若衆がよいちや〳〵とすまふをとるまねをすると、うろたへてもどりとび上り、留五郎をまかすようにしてみせると、目をまるくして外の人にとつてかゝり、留五郎をば鐐こ大ひいきのよし。

同年八月二十一日

昼より町屋川へ鐐あそばせにつれてゆき、……ふねのある所へ鐐こつれゆき候ところ、出たりはいつたり、とものところよりとびおりたり、小石をひろひ、とものところへもつてあがり、その石をなげたり、まことによねんなく一ときほどあそばせ……。

同年八月二十二日

日に増しべろはまわる。わやくもする。あまりわるさをするときは、越後へやつてしまふといふと、もう止める〳〵といふゆへ、そんならおとなしくしやれといふ内、またにこにこわらひながらわるさをする。しかし又ばべるばべやうといふのは、いまだなおらず、そのほかは大分口がきけ、かわいらしく相成候。

同年九月五日

今日も雨ふり。鐐こ起ると栗むいてくんなへといふて、くど端へ来る。柿はそのように喜ばず、栗は誠に大好なり。下いんじよのかめへ、ひとりでしつこをして、じよぼじよぼ音のするを面白がり、よくひとりでかめの中へする。けふも道がわるいに、かめへしつこをしにゆくとて、下駄ばきにて出て膝をつき、着物をよごしたさかい、洗濯綿入のたもとのあるのを着せたところが、誠にうれしがり手まりを入るやら、網を入るやら、御せんをたべるにも膝がよごれるとて手拭をかけ、右のたもとを見左のたもとを見、にこ〳〵笑ひながら御ぜんを食べる。三ぜんづゝはかゝしなくたべる。この間新地の鉄坊がきて箸でたべる故、おれもはしで食べやうといふてさじを止め箸にて

食べ、それから毎日箸でばかり食べる。まへにち佐藤へゆき、騒ぎつけるを、若衆が可愛がりおさつを買ふてもろふたり、栗をかふてもろうたりする。人おくめせぬ故、誰にもかわゆがられる幸な小坊主なり。あまり自慢するやうなれど、ほんに〳〵愛嬌者。

同年九月七日

かなりな天気、鐐こ目をさましたところが、まだお婆がねていたゆへ、大そうにうれしがり、ばゞねていなつたねへといつて、さま〳〵なはなしをして、おきるとすぐにお爺さ栗むいてくんなへとねだる。むいてやる。それより歯を塩にてみがけば、おれにもくんなへといふ。すこし手の平へのせてやる。いつしよになつて井戸端へゆき水をくんでやると、口をそゝぐやら、顔をあらふやらお爺のまねをする。夕べも佐藤へ網すきにゆこふ、つれていつてくんなへとねだる。五寸四方ほどの網を夜昼はなさず、寝るときはね床へ入、あさ起る時には持て起、この網で町屋川へいつて、とと取てきてお婆にあげるぜとおりふし云。殺生好になるもしれんて。

同年九月八日

天気あたゝか、あさ御ぜんたべてから、鐐こ新屋敷へつれゆく。みな様大よろこび、じきうらへ柿をもいでもらひにつれてゆく。おばばさま鐐子のかほをながめて、あのまア可愛らしい顔をおかゝに見せたらどふだろふとおつしやる。それから大きな柿を一つむいてもろふてたべ、おぢやのも半分へる。その内におぢさもおじいさもおかへり、おや鐐こがきているか、よくきたぞと大よろこびなさる。すこしもだかれず、あるき通しましたと云ば、それはかんしんだ〳〵〳〵とくりかへしおほめなさる。じんざも来ていて、鐐さ大きくなりなしたとよろこんでおる。おれはかへるぜやと云ば、あい晩におばゞにおくつてもらうんだといふ。おばゞさま、おゝ〳〵おくつてやるとも〳〵とよろこんでいなさる。

同年九月十五日

鐐こ昨日はたんがおこつて、御ぜんもいつもほどたべず、苦しそふであつたゆへ、しがみあめ買ふてたべさせたのがよかつたかして、夜食はしこたまたべ、元気がよくてあくれつけてどふもならん。

同年九月二十日

鐐こ四五日先から、くいうちを習ひ、毎日お隣へくいを持て遊びにゆく。熊坊らも朝つばらから迎へにくる。どこからもろふてきたか、くいが五六本ある。

同年十月十三日

いやもふ鐐この日ましにわるさをして、いふことをきかぬには、おばゞもころつとする。くれあいにもおばゞが流しもとをしもふているのに、ちちをのもふといふてぶらさがり、ちとまてといふてもきかず、おばゞが云には、このやうにおれをいぢるところを、ととやかかに一目見せたいわと云てくどく。それからせんとふへいつたところが、手ぬぐひをわすれてきたから、とつてこへといふて大だゞおこし、しかたがなへからおこんにいそひでとりにやる。それからよふやくきげんをなおしてかへる。

同年十一月二十二日

今日横村より甘酒を鐐こへもろふ。夕方お婆と銭湯へゆかんかといへば、くしやみが出るからゆかんといふ。お婆いつてきなへ、おれはお爺さとおるすいしているといふて、こたつで本を見ている。お婆が帰つてから眠り四ツ時分眠をさまし、甘酒飲みたへといふから暖めてやる。こんこんさんの皮くんなへといふから、持つてきてやる。その上に坐り甘酒を飲む。今日も日記を書くそばで鐐こ言ふ。おれもおかかのところへじじ書いてあげやうねへ。引出へしまつておきなつたろふといふ。何やら紙へ墨つけている。

同年十一月二十四日

鐐こそのお触れをしつかりにぎつて、どのやうにだましても叱つてもはなさず、しわだらけにするゆへ、むりにとりあげたところが、大だだおこし、お婆とおなかとかかつて、腹へきうすゑにかつたけれど、なか〳〵力があつて、よふよふ一つすゑておきにしたげな。それでもきかんで、お触れをよこせとだだをこねたげな。いやもうこのあいだは、気にいらぬ事じやと、おばゞ馬鹿やろおぢいさばかやろ、だれのことでも馬鹿やろ、おばなどはぼうを持てくらしつける。すみからすみまでわるさをするには、おばゞもこまりはてる。

同年十二月八日（鐐之助四歳）

鐐之助誕生日につき赤のままを炊く。どじやう汁にて留五郎をよぶ。

同年十二月九日

鐐ことおなかに牛を煮て風呂から帰つてから食べさせる。牛のとと甘くてならんと言ふて二人が食べる。鐐こ大丈夫の上牛を食べさせたら、余り騒ぎつけて手にあまるであろふと言ふたら、お婆が言ふには、牛を食べたら牛のやうに、のろくなるやもしれぬと言ふに大笑。

同年十二月十七日

鐐こおなかに負ばれて獅子を見に行く。……鐐児にこたつで昔を語つて聞かせる。又カンゼヨリをしたり紋を切つてやるやら、やうやう色々なことをして遊ばせる。

一八四〇年一月二十六日

鐐こ大分べろがたつしやになり、ばべるもたべると言ふようになり、指四本出してこれいくつといふ故、四つといへば又五本出していくつといふ。五つと言へば引つこませて、げらげら笑ひながら、べろりと言ふて江戸豆をこしらへてちよいと出すを、あゝきたな、きたなといふを面白がり、又初手の通り指を出して、しまひには豆を出す。誰がして見せたと言へば、早川のお婆さ、してみせなつたといふて今日は元気よし。

同年二月十一日

浅野のお爺さに武者だこを貰ふ。あげよふ、あげよふと言ふから、今日は風が強くてあげられぬといふても、なかなかがてんせず。

同年五月十一日

子供といふものは、おかしなものにて、よその子供がごんぞうぞうりを、は

いているを見て、はきたくなり、せつたも皮ぞうりもいくらもあるに、たつた今ごんぞうぞうりを買うてくれといふて、お婆にねだりしゆへ、貰ふてやつたれば、大そうれしがり、毎日そのごん蔵がゑゝといふて、はいて歩きあそぶ。

同年五月十二日

　鐐ゆすらをもぎに出る。寒竹の先を輪にして、飯つぶをくれといふからやる。切れをくれといふ。何にするといふたれば、ととをとるのだといふ。それでは水の中へ入ると、しつきではなれてしまうからだめだ。そんならお爺さこしろふてくんなへといふから、お婆にもじの切五寸に七寸ほどもろふて、ぬいつけてやる。おなかと二人が、めんばちめだかをすくふてきて、うれしがる。昨日夕方のことなり。

同年六月十三日

　鐐、さあお爺さ相撲とろふという。負けてやつてほめると、大そふうれしがり飛び上る。ちんぼが出るから、これでふんどししめてくれといふ。お婆しめてやると、善蔵おかしくて、こたへられぬとて大笑する。

同年六月二十日

　鐐こ寝ている。静かゆへ日記を読む。ろくの枕を抱へて守りする真似、おなごの子は、こしやくなものじやとお婆笑ふ。のこらず読みてしまふと鐐目をさます。ろくの手のひらを見ては、鐐こよりは大そう太つておるとみえて幅があり、ぜんたい男の子の手のひらに見へ、大どた娘とならねばよいがとお婆と笑ふ。

同年七月十九日

　鐐こ相撲を取るにも力足ふむことは止めにして、いさかひにかかろふとゆふて、二間も先からとんできてしがみつき、足がらみをかけて、まかしてやれといふ。足をからみつけて、かつと両手をあげて、うわうといふなり。石取の太鼓もよほど上手にたたくなり。

同年十二月八日（鐐之助五歳）

　昼は子供客隣の子供二人、横村の勝、大寺のはる、長谷川のゑつ、金山の鉄、新地しげ等なり。片山のお婆様八ッ時分お出でなさる。扇子とおなかのところへかんざしおくれなさる。おこんより黒塗の足駄浅黄縮の下駄、新屋敷より紅葉のからかさ黒豆おくれなさる。新地姉様鉄坊をつれてきなさる。鐐之助のところへあしだをおくれなさる。その他は扇子はな紙半紙をもろふ。おせんのところよりみご表に白絹の緒、ぐみの裏付草履、鐐大層によろこびそれをはいて歩く。晩の客は均平、又四郎、為八郎、新屋敷おぢいさおばあさ、浅野のおぢいさ、金吾、大寺、八三郎、春吉、新地姉様、片山おばあさ、郡のおますさ、おきんさ、おこん、佐藤で二人、おますさの娘もよぶ。にぎやかにて鐐うれしがり鉄坊と大騒ぎ四ッ過まで起きている。均平為八郎五郎皆よひ倒れる。八幡へ参りおこわ一重と百文供へる。さこん装束して神酒を供へ、子供に太鼓をたゝかせ、鐐の草履を装束にて払うて御守を御みきと、内からやつたおこわを供へたのをよこす。鐐の

上下を着て草履をはくところを、二人のお婆がいふには、親のない子ではなけれど、遠国へだて一目見せることならず、それともしらず、あのげんきよく参りにゆくことはと、後姿を見て涙ぐむ。

同年十二月十八日

　鐐こちやかまやせぬを唄う。お江戸日本橋より高輪夜あけでてうちんをまで唄う。のぼる箱根も出来る。そのほか大分べろがまわるやうになり、五音相通もちとづつ出来、横よみ、あかさたなはまやらわなどひとり出来る。

一八四一年一月三日

　鐐こ内が賑やかにてうれしがり、中どこの上にて前をまくり、佐藤のおぢさ、郡のおばさ、おこんさ、山岡のせんさも来て見なへ見なへといふ故、代る代るゆけば、そばへきなんな、おかめの下で見なへといふ故、おかめ面を掛けておく柱にもたれて見て、これはえゝちんぼえらいもんぢや、でらぶつじやとほめると、大そうれしがつたとて、みなみな腹筋をよつて笑ふたげな。

同年一月六日

　水瓶にうす氷はる。軒にさがん棒の出来たを鐐見つけ取つてくれとせがむ。羽子をつくから羽子をこしろふてくれとねだる。おみきをつげばおれがつぐ。火をうちかくればおれが打つといふ。丈夫にあくれるがせわはやけれど、わずらふているよりはるかましじや。

同年一月十三日

　鐐之助豆まきにて大喜び。方々へ拾ひに歩き、内の豆ひろひ、佐藤でも鐐が行とまく。

同年一月十四日

　鐐之助、留五郎をねだり西河原のどうど焼見にゆく。

（つづく）

幼児の教育　第七十六巻第九号

九月号　©　定価二〇〇円

昭和五十二年八月二十五日　印刷
昭和五十二年九月一日　発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら，おとりかえいたします。